

医療における情報の価値とは何か：バリュー・スタディへの招待

酒井由紀子

慶應義塾大学文学部 図書館・情報学専攻

NPO 法人日本医学図書館協会

「医療における情報のバリュー・スタディ（以下、バリュー・スタディ）」は、NPO 法人日本医学図書館協会（以下、JMLA）が NPO 法人医学中央雑誌刊行会から受託した研究事業で、受託事業委員会のもとに設置された2名から成るワーキンググループメンバーが主導し、1名の研究協力者と参加病院の協力も得て、2015年から2017年にかけて進行中である。2015年度には第1期調査として2病院を対象に質問紙調査とインタビュー調査が終了し、2016年度秋に実施する第2期調査の参加協力病院を募集中である。この研究の目的は、図書館情報資源を中心とした日本の医療における情報の利用と影響について北米で実施された手法にならって調査を行い、情報資源や情報サービスの価値を明らかにすることにある。その特徴は、研究者と医学図書館員が協働して研究を進めエビデンスをつくることと、医学図書館のアウトカムを把握することである。

本稿では、なぜ医学図書館員が研究に従事するかということ、図書館情報サービスのアウトカムを示すことの意義について講演の背景として述べ、研究成果の一部を提示し、第2期調査への招待の意を表して、第1回学術集会における JMLA-CE コースの予告編としたい。

日本にも根拠にもとづく医療であるエビデンス・ベースト・メディスンが導入されて久しい¹⁾。医学図書館員も利用者である医療従事者にならい、業務にエビデンスを適用して意思決定に活かすエビデンス・ベースト・ライブラリアンシップの実践が必要と言われてきた²⁾。既存のエビデンスがない場合は、求めるエビデンスを自らつくるしかない。そのためには、研究課題を特定し、文献レビューを行い、データを収集して分析と解釈から結論を導くという、一連の研究プロセスを実行することになる³⁾。

一方、インターネットの影響でその情報源としての役割が限定的となった図書館界では、館種を問わず、情報社会という環境変化への対応と経営計画のために、図書館情報サービスの意義を自ら示す図書館評価が盛んとなっている。その評価指標は図書館統計から得られる予算、職員数や蔵書数等のインプットや、入手可能性や提供可能性、提供時間等のプロセス、貸出数、入館者数等のアウトプットを中心とした伝統的なもの⁴⁾だけでは今日許されない。ちょうどエビデンス・ベースト・メディスンにおけるエビデンスを求める際に設定するのと同じ「アウトカム」による評価が最も説得力のある指標とされる⁵⁾。アウトカムとはもたらされる便益や成果のことである。EBM であれば、生存率や治療薬の効果指標、避けられた副作用や合併症、あるいは Quality of Life（生活の質）であったりする。図書館評価では、計画した目標の達成度やそのサービスによって利用者が受けた影響となる。具体的には、大学図書館であれば学生の成績や研究者の論文数など、様々な指標が用いられている⁶⁾。

本講演で扱う「バリュー・スタディ」の目的は、まさに医学図書館の究極のアウトカムである、情報や情報サービスによってもたらされた、EBM と同様の医療における肯定的な

変化をとらえることにある。もともになった2010年から2011年にかけて実施された北米の調査は⁷⁾大規模なもので、計14名の研究者と医学図書館員によって研究チームが構成された。56の医学図書館がサービスを提供している118病院に所属する医師、研修医、看護師を対象として、質問紙とインタビュー調査が実施された。質問紙に対しては16,122人から有効回答を得ている。主な結果として、情報を得たことで75%の回答者に診療において何らかの違いがあったとされている。良い効果の内容としては、患者への助言(48%)、薬の選択(33%)、治療の選択(31%)が、回避された有害事象としては患者の誤解(23%)、追加の検査や処置(19%)、誤診や副作用(13%)等があげられた。講演では他の類似の先行研究についてもふれたい。

JMLAの「バリュー・スタディ」第1期調査には日本の2病院が参加協力に応じ、2016年2月から3月にかけて行われた質問紙調査では合計241名の医師、研修医、看護師から有効回答を得ることができた。インタビュー調査には14名が参加してくれた。質問紙調査の結果では、北米調査と同等の73%が診療において何らかの違いがあったと回答している。講演では必要とした情報や使われた情報源も含め、詳細な報告をする予定である。

本講演では医学図書館のアウトカムを共有すると同時に、エビデンスを図書館員自らがつくる意義についても理解を得たいと考えている。第1期調査でも参加協力病院の図書館・図書室担当者には図書館協力者として研究の一端を担ってもらった。彼らの協力なしにこのデータは収集できなかった。図書館協力者にとって調査に参加する最大のメリットは、客観的に図書館情報サービスの医療における測定したアウトカムによって、病院の目的である医療への寄与を主張することができることである。また、研究のプロセスを経験し、研究者でもある多くの利用者の情報行動を理解してサービス向上につなげられること、さらに自ら必要なエビデンスをつくる方法を身につけられることである。本講演を聞いて、調査結果を待つだけでなく、多くの医学図書館員が積極的に参加してくれることを期待したい。「バリュー・スタディ」への参加は、NPO法人日本医学図書館協会の定款にある”保健・医療その他関連領域の進歩発展に寄与する”という目的が達成されているかどうかを自己点検することにほかならないのである。

参考文献：

- 1) たとえば厚生労働科学研究データベース (<http://mhlw-grants.niph.go.jp/>) で”EBM”を研究課題名に含む厚生労働科学研究検索すると、平成10(1998)年度の「EBM導入研究」(研究代表者 福井次矢)まで遡る。
- 2) 酒井由紀子. EBM から EBL/EBLIP へ (後編) : 医学図書館員による Evidence-Based Practice の実践. 情報管理. 2008; 51(2) : 2-12.
- 3) Marshall JG. エビデンスにもとづくヘルスサイエンス・ライブラリアンシップ. 第85回 NPO 法人日本医学図書館協会総会特別講演. 2014年5月30日. 日本科学未来館.
- 4) Orr, R. Measuring the goodness of library services. Journal of Documentation. 1973; 29(3) : 315-52.
- 5) Hernon P., Dugan R.E. 永田治樹, 佐藤義則, 戸田あきら訳. 図書館の価値を高める: 成果評価への行動計画. 丸善, 2005, 268p.
- 6) Oakleaf M. The Value of Academic Libraries: A Comprehensive Research Review and

Report. Association of College & Research Libraries, 2010, 182p.

- 7) Marshall JG, Sollenberger J, Easterby-Gannett S, Morgan LK, Klem ML, Cavanaugh SK, Oliver KB, Thompson CA, Romanosky N, Hunter S. The value of library and information services in patient care: results of a multisite study. Journal of the Medical Library Association. 2013; 101(1):38-46.